

● 全17の方略一覧

1年	2年	3年
1 説明文の基本構造	1 詩の構成 気持ちを揺さぶる仕掛け	1 隠された意味 国語辞典に載っていない意味
2 人物相関図 鳥の目になって	2 象徴 そこには何かが詰まっている	2 対比 比べることで明確に
3 図表と文章 説得力は文字以外でも	3 段落の大中小 まとまりを探せ!	3 回想 時は行きつ戻りつ
4 三角ロジック 主張・事実・理由づけ	4 物語の転換点 予想外の曲がり角	4 小見出し 要点をひとめで
5 語り手 語っているのは誰?	5 例示 「なるほど!」と言わせたい	5 人物設定 仕組まれた関係
6 情景描写 書かれていない気持ち	6 視点人物 世界が違って見えてくる	

plan

A

読む 読み方を 学ぼう

読むことの「技・こつ」(方略)を実践的に習得し、
次の読むことの学習や表現、日常の読書活動に活用します。

「声に出して読む」「繰り返し読む」
だけでは読む力は伸びません。読解力
育成のためには、読み手による積極的
な働きかけ(方略)が必要であるとさ
れています。

「読み方を学ぼう」では、(構造に留
意して文章全体を俯瞰的に捉える)(例
示(具体と抽象の往還)の効果・意図
を押さえて主張を捉える)(象徴表現
を捉えて直接書かれていない心理や事
象を推測する)(ことばの多重的な意
味作用(デノテーション/コノテー
ション)を認識してイメージを形象化
する)など、汎用性が高く、思考を駆
動する方略を抽出し、平易な解説と図

解を組み合わせて、学びやすいかたち
に教材化しています。

読解(熟考・解釈・評価)は、思考
と表現とが統合されることによつて深
化します。「読むこと」の学習過程に、

「説明」と「交流」という言語活動を
組み込み、読解したことを自分のこと
ばで説明したり、他者と意見交換・相
互評価する場を設けたりすることがよ
り効果的な読解力向上につながりま
す。「説明」「交流」の場においては、
思考を可視化し、それを共有する手立
て・ツールが有効です。「読み方を学
ぼう」の図解は、そのためのモデルの
役割も果たしています。

「読み方を学ぼう」のしくみ

全ての方略は、「読むこと」教材(一部の古典教材を含む)の学習目標を達成するために設置された
「学びの道しるべ」の課題(言語活動等)と組み合わせられています。

● 読むこと教材の本文



(「玄関扉」1年P.124)



「学びの道しるべ」に示された課題と
の関連で学習するしくみです。



● 説明「玄関扉」(渡辺武信)の読むことの学習において設定されているページです。

平成28年度版『現代の国語』1年 読み方を学ぼう ④(P.124)の教科書紙面

● 説明「人間は他の星に住むことができるのか」(渡部潤一)の読むことの学習において設定されているページです。

読み方を学ぼう ③

視点人物 例示 物語の転換点 段落の大中小 登場 詩の構成

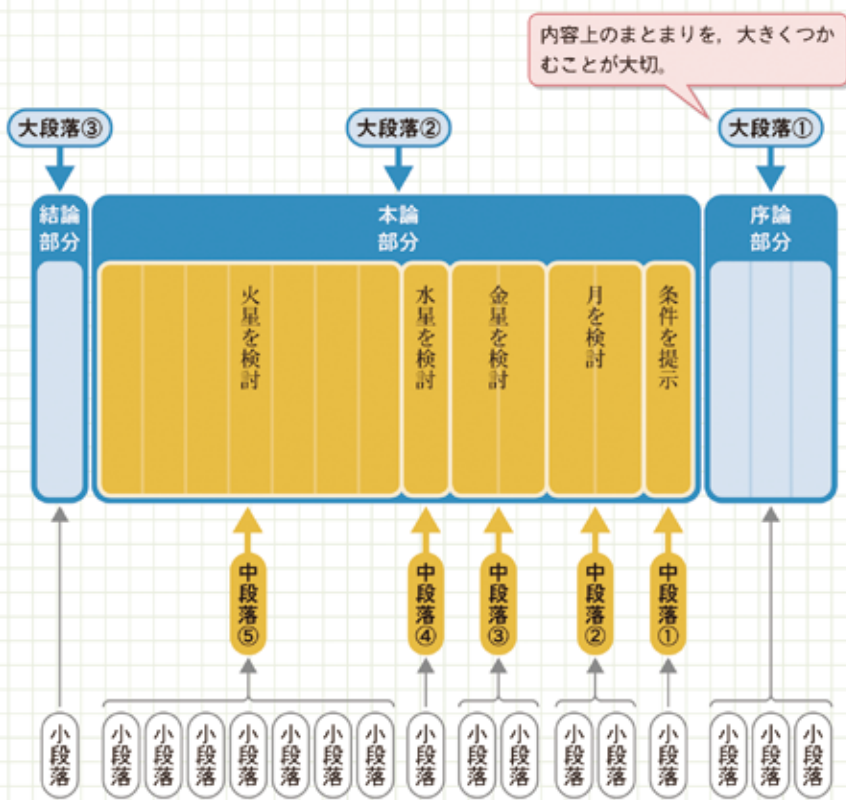
段落の大中小

まとまりを探せ！

段落とは、ふつう、改行と一字下げによって表されます。この最小単位の段落を小段落（形式段落）といいます。小段落がいくつか集まって、内容上のまとまりをつくる段落を大段落（意味段落）といいます。小段落一つで大段落をつくる場合もあります。また、大段落の中に、小さな内容上のまとまりをもつ中段落を考えることもできます。

▼段落の大中小に注意して読むと、本文全体の論理の組み立てが明確に理解できる。

● 「人間は他の星に住むことができるのか」の段落



● 物語「空中ブランコの乗りのキキ」(別役実)の読むことの学習において設定されているページです。

読み方を学ぼう ②

場面描写 語り手 三枚ロケット 物語と文章 人物相関図 読解文の書き換え

人物相関図

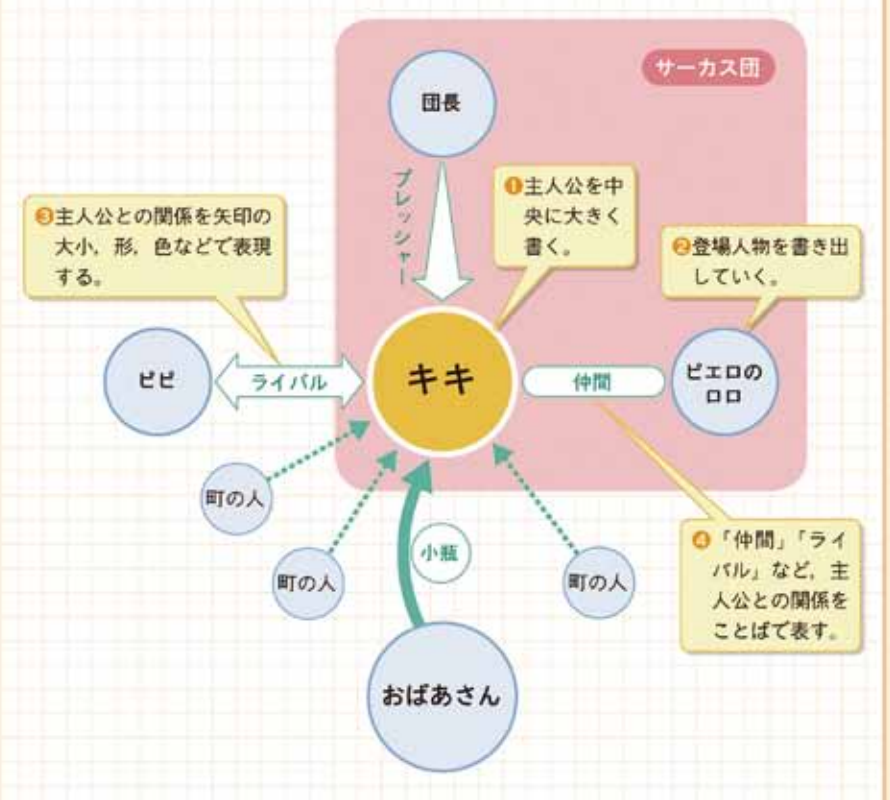
鳥の目になって

人物相関図とは、小説、映画、ドラマなどの登場人物たちの関係を一枚の図にしたものです。「空中ブランコ乗りのキキ」では、どのような人物がどのように主人公キキと関係しているでしょうか。

人物相関図を作ること、物語全体を高いところから眺めるように把握することができ、物語の理解が深まります。

▼人物相関図を作ると、物語の展開のしくみやおもしろさがよくわかる。

● 「空中ブランコ乗りのキキ」の人物相関図



●ねらい

「人物相関図」は、小説、ドラマ、アニメ、ゲームなどにおける登場人物の関係を一枚の図にして表したもので、作品を分析・理解する手立てとなるものです。

「勉強の仕方がわからない」「どうやって力を伸ばせばいいかわからない」などと言及されがちな文学教材の学習に、読解方略（読み方・読解の手立て）の一つとして設定しました。

「人物相関図（の作成）をとおして読解を深める」という言語活動に取り組むことで、俯瞰的な見方（メタ認知）や論理的な思考（関連付け／分析／分類など）が駆動し、内容理解が促進されます。このように、可視化された具体的な方略を自覚的に用いて、その読解効果を体験することで、「わかる」「使える」という実感をもって読解力を高めていくことができます。

●活用場面——学習の文脈

「なぜここで方略を使うのか」「方略を使うとどのような効果があるのか」という学ぶ意義と有効性を生徒が理解・納得できる学習の「文脈」をデザインすることが重要です。

「人物相関図」を用いた学習場面として、ここでは、A「単元前半で内容の情報整理を行うときに使う」、B「単元冒頭の導入で使う」、C「単元後半で作品を読み深めるときに使う」の三つを想定しました（※Cは省略）。

ここで習得した方略は、その後の「竹取物語」「少年の日の思い出」「一年」「小さな手袋」「走れメロス」「二年」などの文学教材の学習で活用することができます。

また、教室以外の学校生活や日常の読書活動において、あるいは、テレビドラマや映画などを視聴する場面において、適宜活用することによって、方略はより汎用性が高まります。「いつでも」「どこでも」「自ら」使えるもの、使いたくなる実践的な技として、生徒の自立性・主体性を支えるものとなります。

「読み方を学ぼう」活用例①

「いつ・どこで・どのように」使うか

1年物語

「空中ブランコ乗りのキキ」

+

読み方を学ぼう

「人物相関図」

▼本書 P.10

A
通読直後に使う

内容の情報整理を行う場面を使う
↓教科書 P.63 学びの道しるべの「1」の課題参照

1 読んだ物語の登場人物同士の関係を図で表したものが64ページにあります。

このような図を「人物相関図」といいます。

①～④は人物相関図をつくるときのポイントです。

2 物語を振り返りながらこの図を見てください。

この図はどのような工夫をしているのでしょうか？

3 この物語の登場人物について、「人物相関図」を使って、

キキとの関わりを中心に説明（紹介）してください。

〈まとめ〉

「人物相関図」は、登場人物がたくさん出てくる物語や小説などをよりよく理解する「技」となります。

今後、小説を読んだりドラマを見たりするときに使えることを紹介して、日常生活などでの活用を促します。

説明と質疑応答により、内容理解の状況を評価する。

矢印や円の大きさ・形・色についての気づきなども引き出しながら意見を交流させる。

B
単元冒頭に使う

導入の場面で使う

1 64ページのような図を見たことがある人はいますか？

このように登場人物の関係が描かれた図を「人物相関図」といいます。

2 この図から、どんなことがわかりますか（どんな物語が予想できますか）？

この図は未完成な部分もありますし、

物語を一度も読んでいないとわからないところもあります。

例えば、この点線の矢印はどんなことを表しているのかわかりませんか。

また、「口口」や「おばあさん」ってどんな人物なのでしょう？

3 使い慣れると、何もなかったところから自分で図をつくっていくのですが、

最初ですから、今回は、これを使って読んでいきたいと思えます。

では、この「人物相関図」を頭に描きながら、

「空中ブランコ乗りのキキ」を読み、相関図を完成させましょう。

〈まとめ〉

読解後に完成させた相関図をもとに、原図の改良点や工夫点（例）矢印の形や向き、大きさなどで

読解した内容がどのように表現されているかなどを交流します。

「人物相関図」という「技」がどのように読解に役立ったかを振り返ることも重要です。

朗読音源や範読を用いて、人物相関図にメモを書き入れながら聞く活動も有効です。

質問には正解がないものもありますが、ここでの活動は、読むことへの動機を高めるとともに、学習スキーマを活性化することを目指します。



●ねらい

「段落の大中小」は、説明文の文章構造に着目する方略です。具体的には「各段落が文章全体の中で果たす役割についてとらえ、叙述の順序が書き手の考えにどのような説得力をもたらしているかなどを考えながら読む」「(中学校学習指導要領解説 国語編)力を高める手立てとなります。

従来、説明的文章の授業においては、ここで図解した段落構成のしくみ(▼本書P.11)を「答え」とする学習活動が多く行われてきました。しかし、今、とくに中学校の授業で求められているのは、そうした小学校での学習を踏まえて、その次の段階の学習——「なぜ、筆者はそうした段落構成の文章を書くのか」について、自分で思考し、それを評価する学習です。

ここでは、文章構造を俯瞰的に見る視点をもとに、文章の全体と部分の関係を把握します。それにより、要旨を捉えるとともに、筆者の構成の工夫(筆者の思考と表現の方略)を解釈し、熟考・評価するという、現代の生徒に「つきたい力」を明確

にした学習を実現します。

●活用場面

「段落の大中小」の学習として、ここでは、A「単元冒頭の導入で使う」、B「単元後半で筆者の表現上の工夫について考えるときに使う」という二つを想定します。(※Bは省略)

また、習得した方略は、「動物園でできること」「(2年)「間の文化」「情報社会を生きる」「(3年)などの評論や論説教材の学習、および「プレゼンテーション」「パネルディスカッション」「主張文」「(2年)、「小論文」「ブックトーク」「企画会議」「(3年)などの「話すこと・聞くこと」「書くこと」における表現学習で活用することができます。



「読み方を学ぼう」活用例②

「いつ・どこで・どのよう」に「使うか

2年説明

「人間は他の星に住むことができるのか」

+

「段落の大中小」

▼本書P.11

A
単元冒頭
に使う

導入の場面で使う

1 今回扱う「技」は「段落の大中小」です。

41ページを開けてください。

2 図を見て次の質問に答えてください。

質問1 これは何についての、どのような説明文なのでしょう？

質問2 大段落1(序論)、大段落3(結論)に中段落がないのはなぜでしょう？

質問3 大段落2(本論)の五つの中段落は、それぞれいくつの中段落からできていますか？

質問4 「火星を検討」という中段落が、その他の中段落よりも、多くの小段落からできているのはなぜでしょう？

質問5 「火星を検討」の中段落の前に四つも中段落があるのはなぜでしょう？

質問6 このようにして、段落を大中小のまとまりにして、

「入れ子構造」にするのはなぜでしょうか？

文章をこのような構造にして説明することの

筆者の意図や効果を考えてください。

3 それでは、実際の文章がどのようなものかを、

読んで(聞いて)確かめてみましょう。

(本文通読後/聞き取り後)さて、何について書かれた文章でしたか？

文章全体の「入れ子構造」を考えながら読んでみて(聞いてみて)、

内容を理解しやすかったですか？ どのようないところがあったか、

新しく体験したり発見したりしたことを、グループで話し合ってみましょう。

4 「段落の大中小」を読み手の「技」として使いましたが、

この「技」は、皆さんが文章を書くときにも使える「技」です。

「技」によってつかんだ情報を、「学びの道しるべ」の課題「1」「2」で、

確かめながら振り返りましょう。

聞く活動の場合は、41ページの図にメモをしながら聞きます。

質問には正解がないものもありますが、ここで
の活動は、読むことへの動機を高めるとともに、
学習スキーマを活性化することを目指します。

参 考

汎用的な能力の育成

ここで学ぶ「入れ子構造」は、文章読解や文章表現の方略であるとともに、ものごとをわかりやすくまとめたり、人に伝えたりするために、要素ごとに分割し、それらを順序立てたり、分類したり統合したりして整理するときの基本的な思考法・表現法でもあります。

「読み方を学ぼう」では、この他にも(例示(具体と抽象)「対比」など、実生活において汎用性の高い思考法や表現法を扱います。これらは、国語科の授業だけでなく、他教科や学校外の日常生活のさまざまな機会に繰り返し活用することによって、読解力(理解力)・思考力・表現力を統合的に高めるとともに、問題解決力や批判的思考力などの汎用的・実践的な高次の認知スキルを支えるものとなります。